

ひと・まち・自然

トロまち Press

(一財)世田谷トロストまちづくり情報誌

Vol. 12
Spring 2014



特集

あなたの「庭」は 地域の宝物

1坪の庭でもはじめられる
生き物との共存

小林 光

せたがや散歩日和 第12回

起伏を生かした 住宅地と水路をめぐる

梅ヶ丘駅～羽根木公園～徳明地蔵～東松原商店街～
羽根木1・2丁目～在林館～和田掘給水塔～玉川上水～代田橋駅へ

結び葉 第12回

坂口 賢一さん

人とまちを幸せにする商店街へ

あなたの「庭」は

地域の宝物



世田谷の みどりを支える 個人の家の「庭」

活を豊かにするために家と庭は切り離せないものであるはずだ。しかし現在、相続のために土地が分割され、そこに狭小住宅が建ち並ぶ都市では、広い庭がある家は年々少なくなってきた。

そのような考えを胸に、自らの家に自然を取り込む庭をつくり、近隣に開く人がいる。また、地域の道路際や各家の軒先に花の苗を手渡す人、多様な活動を通して庭の必要性を問う人もいる。今回は「庭」という視点から世田谷の環境を支えようと活動する人々を紹介する。

例えば、あなたの家の小さな庭やベランダの鉢植え、道端の緑地……。都市の自然が減少している現在、そんな小さなみどりが、良好な環境を保全するのに大きな役割を担っていることをご存知だろうか。様々なみどりを守り育てる人々を、世田谷のまちで見つけた。



1.「成城四丁目小さな森」。2.「成城三丁目小さな森」3.「代沢四丁目西町会」の人々が手入れをする北沢川緑道の花壇。4.「土とみどりを守る会」のメンバーと奥沢二丁目の住民。

かつて、日本の多くの家には庭があり、私たちは日々の暮らしの中で自然の恩恵を受けてきた。「家庭」という言葉が「家」と「庭」からなるように、本来、人々の生

物が見受けられ、自然に恵まれていった世田谷区。その緑被率の約6割が、実は民有地のみどりであ

特集



成城四丁目小さな森／成城三丁目小さな森 自然に近い庭をつくり生きものを呼びこむ

成城学園前駅から徒歩圏の住宅地の中に、「成城四丁目小さな森」、

そして「成城三丁目小さな森」はある。これらは「小さな森」という当財団の制度に登録されている個人宅の庭で、1年のうち数回開かれるオープニングデインでは誰でも庭を訪れることができる。2つの庭に共通する特徴は、庭のみど

りに様々な生きものが集まり、共存しているということだ。

（成城四丁目小さな森）は、広さ約80坪、カエデやウメ、ツバキといった樹木の合間に顔を出す楚々とした山野草の姿が、まるで野山をそのまま切り取ったような自然の美しさを、人の手がつくつた庭にもたらしている。なかでも

池、山野草……野趣溢れる庭は生きものたちのオアシス

池、山野草……野趣溢

成城学園前駅から徒歩圏の住宅地の中に、「成城四丁目小さな森」、そして「成城三丁目小さな森」はある。これらは「小さな森」という当財団の制度に登録されている個人宅の庭で、1年のうち数回開かれるオープンガーデンでは誰でも庭を訪れる事ができる。2つある。この庭に共通する特徴は、庭のみどりに様々な生きものが集まり、共存しているということだ。

「成城四丁目小さな森」は、広さ約80m²、カエデやウメ、ツバキといった樹木の合間に顔を出す楚々とした山野草の姿が、まるで野山をそのまま切り取ったような自然の美しさを、人の手がつくつた庭にもたらしている。なかでも

興味をひかれるのは、庭の中ほどにある水を湛える小さな池の存在だ。サギソウやミソハギの咲く湿地帯に囲まれた水の中には、メダカをはじめタニシやヤゴなど多くの水生生物が息づく。この池は庭のオーナー・篠原信賢さん自らが

ツルハシを握って掘ったものだ。
「いろいろな山野草を地植えし、
深さの均一でない池をつくること
で多様な自然環境をつくり、庭に
より多くの生きものが暮らすこと
ができるよう」と考えました」

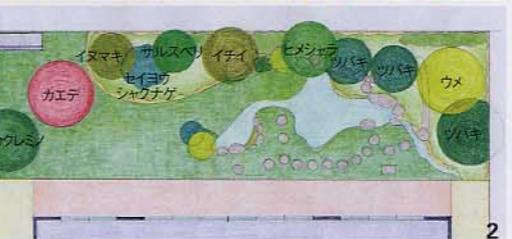
季節ごとに花をつけ、羽化したトンボたちが池から飛び立つ。飛来した鳥たちが池の生物を目当てに舞い降り、地中ではモグラがせつせと土を掘る。すべての生きものが自然のサイクルそのままに生息し、共生する「生物多様性の庭」が、家の軒先に広がっているのだ。「庭を見ていると、日々新たな発見があり、頭だけでなく体全体で自然の営みを感じ取ることができる」と篠原さんは言う。例えば自然界では、ある生物が増えても、食物連鎖により時間をかけて元に戻り、おのずと生態系のバラ

の力を過信しすぎてしまった。そんな私たちも身近な自然に目を向けることで、自らが自然の一部だと気づき、地球環境について考えることができるのでないでしょうか。小さな庭でも、たくさん集まれば環境に貢献できるはず」

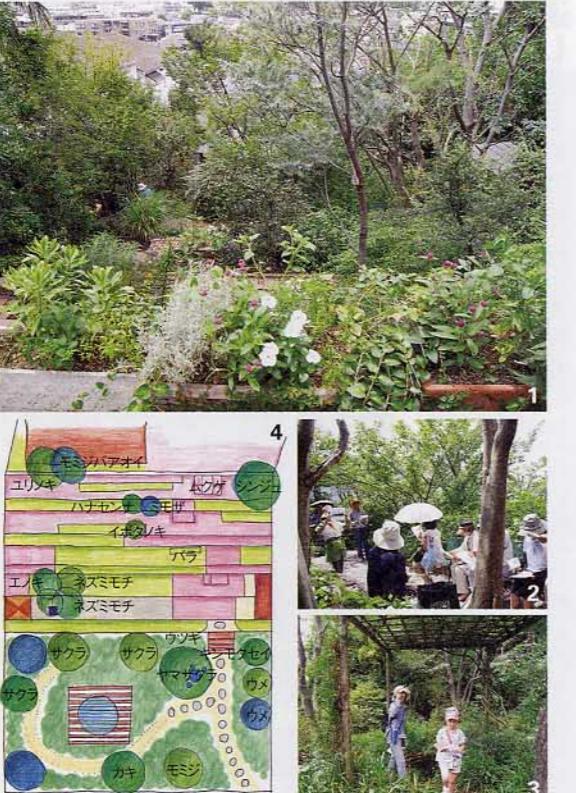
篠原さんの言葉は、オープングアーデンに訪れた人々の心に静かに染み渡つていくように思えた。

一方、「成城三丁目小さな森」は、国分寺崖線上にある富士山を臨む庭だ。その傾斜を活かし、レンガを使い階段状に整えられた土地に、サクラやウメ、エノキとい

小さな森 みどりを守り育んでいく想いをもった個人所有の50㎡以上の庭を広く募り、財団が認定・登録し、みどりの保全を図る制度。所有者への保全のアドバイスやボランティアの協力を得てオープンガーデンを行い、みどりを守る大切さを広めています。現在、区内で10カ所登録。関心のある方は、下記までお問い合わせください。
☎03-3789-6112(小さな森担当)



庭を訪れた人々も、手づくりのピオトープに興味津々。2. 庭の植図。落葉樹と常緑樹をバランスよく配置。



1. 階段を下るごとに、迫るようなみどりが出迎えてくれる。2. 庭のオーナーとの交流もオープンガーデンの愉しみ。3. 蝶を追う子ども。4. 庭の植栽図。高木が多く見られる。



北沢川緑道にきれいに咲きそろ
う花壇の花々、芝信用金庫の周囲
を賑わすプランターチャー植えの花、
家々の軒先に連なる鮮やかな花
……。これらは代沢四丁目西町会
の人々の手でまかれた種から咲い
たものだ。

道端や軒先を彩る花で地域に笑顔を
代沢四丁目西町会

代沢四丁目西町会

中心人物である柳澤登美子さん、岡本よし子さん、佐藤一枝さんは、新しい町会事業として、みんなが好きで長く続けられることを始めようと見え、花の活動を思い立った。踏み出しの一歩は、サクラソウや排気ガスなどを吸収す

る効果があるというサンパチエンスの苗を配布することから始ました。だが、夏の熱帯化などで生育が難しいことが判明する。また同じ頃、世田谷区と協定を結び、緑道に花壇を新設し、委託される話も生まれた。できるだけ多品種の

花を植えることができ、かつ手のかからない方法はないかと考えた末、種から苗を育てる方法を専門家から学び実践した。

種から育てた植物は芽吹いた環境に順応して、丈夫に育ってくれる。結果として、費用も抑えら

右から、ニホンミツバチ、オオシオカラトンボ、クロアゲハ、ナミアゲハ。中村さんの庭には多様な生きものたちが息づいている。



1.スイレンの花の下からも、命の息吹を感じる。2.ギボウシの花。季節を告げる山野草が庭に佇む。



れ、植え替える回数も少なくてすむ。種から苗を作るのは慣れないと難しいため、苗は、町会の岡本さんと佐藤さん、ふたりの家で試行錯誤しながら育てられている。苗がうまく育たない場合も考えて予め多めの数で計画し栽培する。

年に2回、6月と11月に町内の掲示板に苗配布の便りが掲示されると、約200世帯から苗を希望する声があがる。花のほかにも、バジル、オクラ、パセリなどの野菜の苗は、花だけでなく食べる楽しみができると好評だ。庭のない家でも、プランターで育て収穫することができる。一世帯あたり約5種類の苗を用意、プランタ-13つほどになるよう計算し、通りごとに色がそろうように考えながら配布する。大規模な緑化にはならないかも知れないが、道端や家の軒先など、公共の場との接点にみどりを置くことでまち全体に花が満ち、道行く人々の心を和ませてくれている。

始めてから4年の歳月が経ち、町内では顔見知りが増え、自然と声掛けが増えた。お天気以外にも共通の話題となる「花」を介して話すことで、ごく自然に高齢者と若い世代が交流するようになった

会では、年4回のニューズレタ-の発行、「つどい」やまちあるき、チエリーセージの配布といった、地域で交流を生み出すための多様な活動を行っている。

「様々なコミュニケーションが生まれるきっかけがあること、それがこの地域で心豊かに暮らすためには必要なことです」

そう語る堀内さんは、自宅に隣接する空き家を「シェア奥沢」として地域に開放し、会が開催する「つどい」の会場などに提供している。多岐に渡るトークと音楽会などを組み合わせることで、いろいろな関心事をきっかけに、地域の人たちが集まる機会にしている。会のメンバーは、庭木を残したいと考える住人の相談役にもなる。その結果、会の想いに賛同し、家を建て替える際に庭木を残した人もいる。

しかし、庭木から出る落ち葉が道路に散らかることを嫌がる声も町内にある。そこで始めたのが、「落ち葉掃きプロジェクト」だ。道の手入れが行き届き美観が保たれれば、おのずと人の気配が伝わり防犯にもつながる。また、子どもが参加することで、みどりへの愛着心を高める機会にもな

れ、植え替えの回数も少なくてすむ。種から苗を作るのは慣れないと難しいため、苗は、町会の岡本さんと佐藤さん、ふたりの家で試行錯誤しながら育てられている。苗がうまく育たない場合も考えて予め多めの数で計画し栽培する。

年に2回、6月と11月に町内の掲示板に苗配布の便りが掲示されると、約200世帯から苗を希望する声があがる。花のほかにも、バジル、オクラ、パセリなどの野菜の苗は、花だけでなく食べる楽しみができると好評だ。庭のない家でも、プランターで育て収穫することができる。一世帯あたり約5種類の苗を用意、プランターハンズなどになるよう計算し、通りごとに色がそろうように考えながら配布する。大規模な緑化にはならないかもしれないが、道端や家の軒先など、公共の場との接点にみどりを置くことでまち全体に花が満ち、道行く人々の心を和ませてくれている。

のだ。同時に、高齢者の家の植物がしおれていると安否を気遣つて生まれた。また、町民が以前よりも掲示板や回覧板によく目を通すようになり、防災やパトロールといつた他の町会事業にも多くの人が参加してくれるようになつた。

「配つた花を見かけると、我が子が育つているようで嬉しい。まるで自分の庭が広がつたような気がします。花に関わっている時は親の介護も忘れていられるの」

満面の笑みとともに、佐藤さんが明るい声で話す。広がるまちのみどりとともに、それを取り巻く人々の笑顔の輪は、これからも増え続けていくに違いない。

多世代のつながりを通しまちの住環境を守る

まちの住環境を守る
を守る会

1998年、奥沢二丁目の住人

とができる。しかし、相続を機に小さく分割された土地に新しく建てられる家には、庭もほとんどなく、また高木も見られず、みどりは減る傾向にあるのも事実だ。

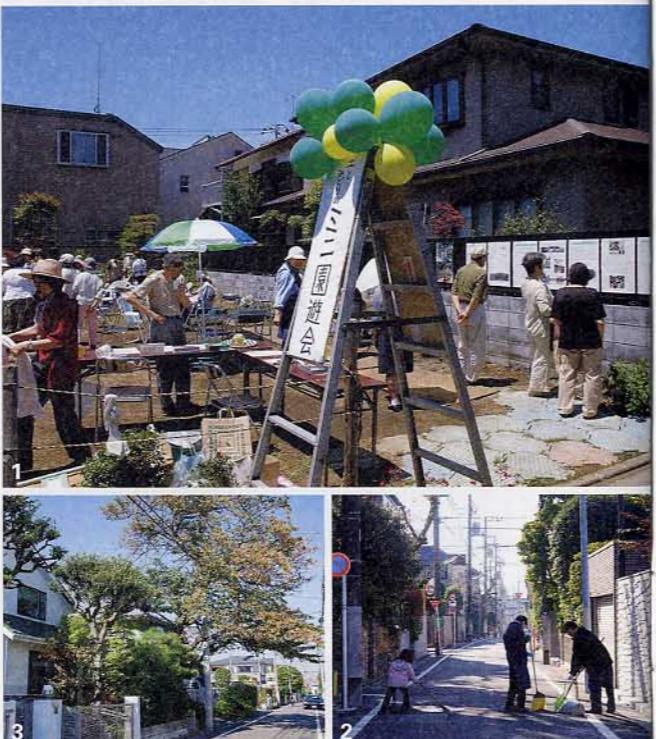
りNPO法人「土とみどりを守る会」が発足した。みどりは土が伴うことでヒートアイランド現象を防ぎ、雨水浸透で地下水を蓄え、鉄砲水を防ぐことができる。こういったみどりの効果を守り、良好な住環境を次世代に継承していくという強い想いが、「土とみどり」のネーミングに込められているのだ。

である堀内正弘さんらを中心となりNPO法人「土とみどりを守る会」が発足した。みどりは土が伴うことでもヒートアイランド現象を防ぎ、雨水浸透で地下水を蓄え鉄砲水を防ぐことができる。こういったみどりの効果を守り、良好な住環境を次世代に継承していくことを強く想い、「土とみどり」のネーミングに込められてい



1.水やりは大切な作業。2.種が発芽した状態。成長にあわせ大きいポットへ植え替える。3.皆で作った花壇が道行く人々の目を楽しませる。4.街角を華やかにする花のプランター。5.手間暇を惜しまず愛情を注ぎ、苗を育てる。6.配布する苗を手に、一軒一軒町内の家を回る。

自分たちの住むまちを潤し
土とみどりを次世代へ受け継ぐ



「つどい」では、老若男女が地域の交流を深める。2.落ち葉掃きの様子。3.家の建て替えの際に残されたサクラの大木。今日もまち静かに見守る。

がこの地域で心豊かに暮らすためには必要なことです」

そう語る堀内さんは、自宅に隣接する空き家を「シェア奥沢」として地域に開放し、会が開催する「つどい」の会場などに提供している。多岐に渡るトークと音楽会などを組み合わせることで、いろいろな関心事をきっかけに、地域の人たちが集まる機会にしていく。会のメンバーは、庭木を残したいと考える住人の相談役にもなる。その結果、会の想いに賛同し、家を建て替える際に庭木を残した人もいる。

しかし、庭木から出る落ち葉が道路に散らかることを嫌がる声も町内にはある。そこで始めたのが、「落ち葉掃きプロジェクト」だ。道の手入れが行き届き美観が保たれれば、おのずと人の気配が伝わり防犯にもつながる。また、子どもが参加することで、みどりへの愛着心を高める機会にもな

「都会のみどりを
く「庭」を始めとする都

土があり、様々な動植物が息づく「庭」を始めとする都市の小ささ

なみどりは、自然環境の保全に役立つてゐる。しかもそれだけではない。そんなみどりを守ることで、地域の人と人が手を取り合ひ、ひとり暮らしの高齢者の見守りや子どもたちを危険から守るきっかけにもつながっていく。

舗装された道路と希薄な人間関係が進む現代だからこそ、みどりをひとりひとりの手で育て、それを地域の「みんなの庭」として分かち合う時がきているのだ。たゞえ集合住宅でも、また家に庭がなくても、ベランダなどで鉢やプラ

ンターに植えた植物を育てる、ツル植物を使ってみどりのカーテンをつくることができる。

トラストまちづくりの制度「小さな森」に登録されている庭では、オープンガーデンの日に見学することはもちろん、ボランティアとして、植物の手入れなどの手伝いをすることができる。みどりを身近に感じる気持ちが大事なのだ。ぜひ、あなたもみどりに触れ、心静かに耳を傾けてみてはいかがだろうか。自然が発するメッシュージにきっと気づくはずだ。



1坪の庭でもはじめられる生き物との共生

小林光

都市は、人の住いを拡大したようなもので、安全で快適、便利な暮らしが営むことを助ける装置です。人類という生物種の巣です。

ところで、この巣が、中に住む人類の安全などを保障してさえいれば良かつた時代は過ぎのものになりつつあります。巣が広がり、大きくなり過ぎ、そこで営まれる活動のために巣の外から運び込まれる物質やエネルギーが膨大になって、巣の外の地球の環境がみすぼらしいものになってしまった。また、巣から捨てられる廃棄物や廃エネルギーが、これまで地球を大きく汚しています。巣の中だけにいると忘れがちになりますが、人類は、そして、人類の巣である都市は、ひとりでは成り立ちません。地球の環境があつて、物質やエネルギーを私たちに提供してくれるから生きることができます。

しかし、このままでいくと、人類や都市と、そして住みやすい地球の環境とは、共倒れになる危機が迫っています。

人類の巣が地球の環境と仲のよい関係になるように、そのあり方を変えるのが現下の差し迫った課題です。地球の方に変わってくれとは頼めないので、変わるべきは私たちの方です。

21世紀の都市はリサイクルと自然エネルギーの活用

どう変えればよいのでしょうか。

一つには、物を今以上に大切に使うことです。都市には、膨大な物資が集まりますから、都市でこそ、その壊れた物、使い終わった物を経済的に集めて、再生したりする仕組みを設けることは比較的容易です。21世紀の都市とは、都市のルールやビジネス、そして公共施設にリサイクルなどの仕掛けが組み込まれたものでしょう。東京都や世田谷区といった日本の都市は、ごみの再生の仕掛けは世界的にみても大変に発達しています。けれども、工場や廃棄物焼却施

設、下水道の終末処理場、ビルや地下街といつたところから捨てられる排熱の活用は、欧米に比べ、まだ見劣りします。

第2に、エネルギーの使い方を変えることです。石油や石炭に頼っていると、温暖化が進み、地球の気候が激変します。そこで、21世紀の都市では、化石燃料への依存を減らして、太陽の熱や光はもちろん、風力や燃料用木材にしても太陽の恵みが姿を変えた物です。で、それらの活用が望れます。

図は、我が家の例です。世田谷にある我が家敷地は 110m^2 程度です。電気やガスの請求書から換算すると、その場所で、私たち家族は、1年間に $4万7千\text{MJ}$ （メガジユール。熱量の単位）のエネルギーを使っています。ところで、理科年表などに出てる太陽エネルギーの統計を参照すると、東京のこの 110m^2 の土地には、年間で、 $46万\text{MJ}$ ものエネルギーが降り注いでいるのです。なんと約10倍。つまり、自然のエネルギーの密度は、家庭生活を維持できる程度に豊かなのです。これを利用しない手はありません。ちなみに、雨水も、計算すると、我が家で使う水道水の量とほとんど同じでした。自然の力は偉大です。太陽の光や熱、雨水などをして賢く使う都市が21世紀の都市となるでしょう。



理想の都市は小さな庭から始まる自然との共生

物質やエネルギーの観点で、都市が地球に迷惑をかけなくなつたら、それで、21世紀の都市になるのでしょうか。

私はそうは思っていません。植物などの他の生き物と共に生存することを学び、実践しないと、人類は、本当の意味で、地球の善い仲間にはなれません。物質やエネルギーの使い方は、仲間になるための手段ではありますが、それだけでは不十分です。仲間になることに直結するのが、他の生物との関係づくりです。植物を例にあげても、その果たしている役割は極めて大きくて多様です。堅固な地盤づくり、酸素の供給、温度や湿度の調整、他の生物の仲間たちへの食物や住処の提供、美しい景観づくり、文化や芸術の糧となるなど、測り知れない恵みを地球や私たち人類に与えてくれています。人類の巣の中でも、植物をはじめとした生き物をもつと呼び込み、適切に共生していく必要があります。

生き物との共生などと言うと難しそうですが、実は誰にでも始められることなのです。

例えば我が家では、植物やそこを訪れる昆虫や鳥などのために用意している空間は、本当に1坪に過ぎません。その1坪を、私は、在来の郷土の植物、特に、蝶たちが好んで食べるものの（食草、食樹）を植えて、坪庭ならぬ、1坪ピオトープにしました。そうしたこところ、我が家窓からは、なんと24種の蝶を見ることができました。この坪庭で繁殖したものも6種いました。関東地方に住む蝶はおよそ100種と言われますので、その約4分の1に、たった1坪で出

会えるのです。ほんのちょっとの工夫ですが、花や鳥、風月を愛でて暮らすことができる、生活はその分豊かになります。

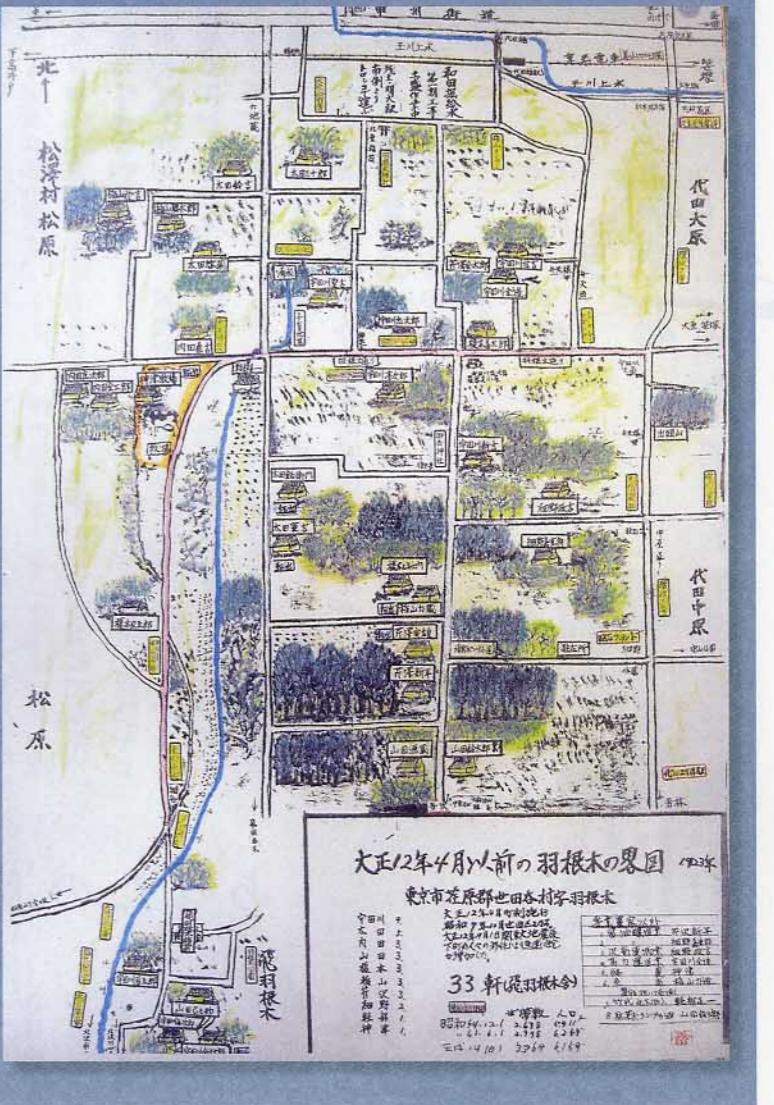
もちろん、こうした工夫が各所で凝らされていなければ、都市全体としての自然との共存はかないません。お庭がなくとも、街路樹の下の植え込みを近所で管理することもできます。お庭があれば、例えば、建て替えたたびに複数のお宅が、坪庭どうしを寄せ合わせていついたらどうでしょう。いつかそこには、大きな庭が生まれ、一層大きな木を育てることができます。

慶應の大学院の私の学生の一人が、成城を例にして、ある程度広いお宅は相続に伴つて分割されてしまうことが多く、分割されると、いっふんに緑が大きく減ってしまうことを、観察やシミュレーションによる再現で明らかにしました。そして、緑を減らさないために、敷地の所有権が分筆登記されても庭が作られるように、共同庭を作る場合に容積率の特例割増をするというルールを提案しました。これは一例ですが、このように、社会が手助けをすると、自然は都市の中にもつと戻つてきます。川崎市についての国立環境研究所の研究ですが、市内の緑化可能な場所をすべて緑化すれば、都市の夏の気温は最大で2度も引き下げられるそうです。

私は、21世紀末の都市は、見た目にも今とまったく違つたものになると思っています。それは、ビルも緑の丘のように林や草花をまとい、住宅は木々に埋もれた、森みたいな都会です。また、そういうないと、おそらく90億を超える人類の安全で快適な暮らしは成り立たないと思います。そこに向けて、世田谷区から、そしてご近所から、一工夫を始めましょう。

小林光 KOBAYASHI, Hikaru

慶應義塾大学大学院および環境情報学部教授。博士(工学)。
専門は環境政策論、エコまちづくり、環境共生経済論。
1949年世田谷生まれ、現在も区内在住。慶應義塾大学経済学部卒業。
東大まちづくり大学院修了、パリ12大学都市研究所満期退学。
73年環境庁入庁。環境管理局長、地球環境局長、環境事務次官などを歴任し、2011年退官。



地元に住み続けた人が晩年に描いた1920年頃の羽根木の覚え書き地図。

起伏を生かした住宅地と水路をめぐる

梅ヶ丘駅～羽根木公園～徳明地蔵～東松原商店街～羽根木1・2丁目～在林館～和田堀給水所～玉川上水～代田橋駅

起伏を生かした羽根木公園を通り、緑道や水路、住宅地をめぐる。あちらこちらでお地蔵様に手をあわせ、私設郷土資料館のような地域共生のいえ在林館へ。和田堀給水所ではその偉容に圧倒され、江戸時代の先人の知恵、玉川上水にたどり着く。案内人は在林館館主、在塚礼子さん。

せたがや
散歩日和

第12回

地域コミュニティの中心

梅ヶ丘駅から羽根木公園へ

「私は、自転車に乗れないのに行動半径が極めて狭いんです」と笑うのは在塚礼子さん。地域共生のいえ、在林館館主であり今回の案内人だ。祖父の代から羽根木に暮らし、まちの変遷を眺めてきている。

起伏を生かした住宅地と水

路をめぐる今回の散歩は小田急線梅ヶ丘駅から出発。

在塚さんが颯爽と歩く後ろについて、駅を背に赤堤通りを渡る。世田谷区立羽根木公園の梅林が見えてくる。

「ここはかつて根津山と呼ばれていました。雑木林や茂みばかりの少し怖い場所で、東武鉄道の根津さんの土地だったんです」

羽根木公園は、1956年

に都立公園として開園し、65年に区立公園に移管された。

現在は区民の憩いの場として開放されている。丘の上からは富士山が見える日もあるそ

うだ。世界遺産を眺められる公園がまちにある。なんだか贅沢な気分だ。

公園には羽根木プレーパーク・野球グラウンド・テニスコート・区立梅ヶ丘図書館などがある。毎年10月には雑居

まつり、2月には梅まつり、地域コミュニティの中心となっている。

日の差し込む明るい梅林を抜け、羽根木プレーパークにさしかかる。「自分の責任で自由に遊ぶ」の立て札が目に

入る。たき火や水遊びができる子ども達の冒険遊び場だ。「ここはね、お正月には凧揚げができるんです」と在塚さんが話す野球グラウンドの脇

を通る。青空に風が風をはらん

で揚がっているのを想像しながらゆるやかな丘を下る。

丘の下の大きなケヤキになにやら人が。聞けば北沢公園管理事務所で樹齢約80年ほど

のケヤキの状態を調べているところだという。樹木医が専用の機械を使って中の状態を調べ、老木をいたわるように見ている姿が印象的だった。

羽根木公園の丘を後にし、住宅地へ出る。

「羽根木」という、羽根木公園のあたりのことと思つていらっしゃる方が多いですが、羽根木公園の住所は現在は代田です。羽根木はかつては世田谷村の字名で、このあたりは「とびはねぎ」と呼ばれた飛び地だったのです。大学で長く教鞭をとられた在塚さん。地元のことも、きめ細かに調べている。

起伏のある道に お地蔵様

東松原から羽根木の住宅地へ

五叉路になっているところにお地蔵様が祀られている。この界隈にはお地蔵様が多く



見られる。それは起伏の多い地形と無関係ではないのだろう。小さな丘と谷の連続は、それらを縫うように集落をつなぐ道ができ、分岐点には守り神としてのお地蔵様が祀られたようだ。

お地蔵様の慈悲と徳によつてこの地が明るくなるようにと願いが込められているといふ「徳明地蔵」。今では道路に挟まれた三角地帯でちょっと窮屈そうだ。少し先には「明林地蔵」が道行く人を見

守っている。東松原の商店街を抜けて、京王井の頭線東松原駅の手前を線路に沿つて右へ。新代田駅方向へ向かう道も起伏があり面白い。谷の底にあたる部分は、水路の跡が緑道になつ

在林館 【ありりんかん】

12件目の「地域共生のいえ」として誕生した。「地域共生のいえ」とは、オーナー自らの意思により、地域の公益的かつ非営利なまちづくり活動の場として、地域の絆を育み、開放性のある活用がなされている私有の建物をいう。まちに開かれた在林館のギャラリーは、この住宅地の歴史を語り継ぎ、地域の方々の出会いと交流の場となっている。

場所:羽根木2-34-4 HP:「在林館通信」<http://aririnkan.blog.fc2.com/>



羽根木プレーパーク内「そら豆ハウス」 【ねねぎぶれーぱーくないそらまめはうす】

2011年に「乳幼児をもつ親と多世代の交流ハウス」として、世田谷まちづくりファンド「拠点づくり部門」の助成を受けてオープン。乳幼児を連れた親子が気軽に立ち寄り、外遊びに親しむきっかけの場として、多世代が出会い、ふれあう場として活用されている。おむつ交換や授乳など気軽に利用できる。

開室:月曜、木曜、金曜、最終土曜日(AM10:30~PM2:30)



雑居まつり 【ざつきよまつり】

毎年秋に羽根木公園で開催される市民による市民のためのお祭り。2014年で39回目を迎える。「地域の問題は地域住民の手で」を合言葉に、活動する団体や個人によって行われている。福祉、環境、教育、食、平和、国際協力などの分野で活躍する100を超す市民団体が力を合わせ、実行委員会形式で開催。





昭和の配水池と江戸の上水

羽根木神社から代田橋駅へ

在林館を出て羽根木神社へ向かう。途中にはまた子育て地蔵。お地蔵様に手を合わせ、羽根木神社参道と書かれた石碑を曲がる。

マンションの前にだけ残さ

今回は高低差のある住宅地をたどり、かつて水田があつたことを偲ばせる水路に出会う散歩だった。給水所もまた、このまちを象徴するモニュメント的存在だ。時を経て、まちは変わつても高低差のある地形は変わらないだろう。自転車や自動車で飛ばしてしまっては見えてこない、まちの細やかな表情を伝えてもらうことで、より鮮やかに知ることのできた散歩道であつた。

ゆづり橋

【ゆづりばし】

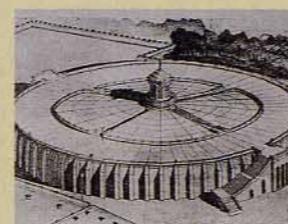
1991年に、地域住民や児童館の協力のもと再整備された橋である。以前は、橋の幅が狭くゆづり合って渡っていたため、ゆづり合う心の優しさの想いをこめて「ゆづり橋」と名付けられた。橋詰め広場には、水道管がモチーフとなった車止めを6基設置。この中には、10年後の自分たちへあてた手紙が入ったタイムカプセルが埋められ、2001年に開封された。



和田堀給水所

【わだぼりきゅうすいじょ】

当初、杉並区の和田堀に建設が予定されていたためにこの名がついた。世田谷区大原は標高が高く50mの高さがあれば東京駅前の丸ビルの上まで水が揚げられるということもあり、名前は和田堀のまま、大原の地に造られた。工事は大正初期から始まり、2号池が1924年(大正13)、次いで1号池が1934年(昭和9)に完成した。かつては、桜やツツジの開花時期に合わせ、給水所の一部を一般公開していた。



れたケヤキの大木数本が参道の面影をわずかに留める。マンション建設の際に、地域住民が参道の木を残す保存運動をして残されたというこの並木は、「せたがや百景」にも選ばれている。

羽根木神社が見えてきた。創建は不明だが、江戸時代中期には「北つぱらのお稻荷様」と私」というタイトルで、これから行く和田堀給水所に関

と呼ばれ、地元民に大切にされているらしい。

羽根木神社の屋根越しに東京都水道局和田堀給水所の1号配水池が見える。32角形の円筒形は、古代ローマのコロッセオを思わせる。老朽化のため建て替えが決まっているのがとても残念だ。

玉川上水に出る。かつて江戸市中へ飲料水を供給していた玉川上水。この辺りでわずかに地上へ顔を出し、あとは新宿御苑近くの四谷大木戸口の終点まで暗渠となっている。振り返ると、地下に水道管が埋まっている道が真っすぐこちらへ向かって延びている。広い道だが車は通れない。

「ゆづり橋」と書いてある橋の隣に水道管が玉川上水をまたいでいる。ゆづり橋を渡り、玉川上水脇の遊歩道を歩く。ひんやりとした空気が気持ちよい。代田橋の駅ホームをくぐり、甲州街道へ出て、代田橋の商店街を通りゴールの京王線代田橋駅へ。

今、新宿の高層ビルを見たばかりだが、木漏れ日射す大きな木々が、風に葉を揺らしている。「羽根木」という地名の由来は木が生い茂り、いろいろな鳥が飛んで来たからというのが一般的だ。このエリアはその昔の面影が十分に感じられる。地元の人の定番の散歩コースのようだ。

心地よい森を抜け、住宅と住宅の間の細い細い道に入る。在塚さんが子どもの頃はここには小川が流れていたそうだ。「ヒルガオの花をつみ取つて投げて、クルクル回りながら流れいくのを飽きずに眺めていました」

これから行く在林館のあたりには神津牧場があった。1914年から28年頃まで3千坪の土地に50頭ほどの牛が草を食む光景が見られたらしい。都心に近く、主な取扱いは、華族や皇族にミルクやバターを納めていた。

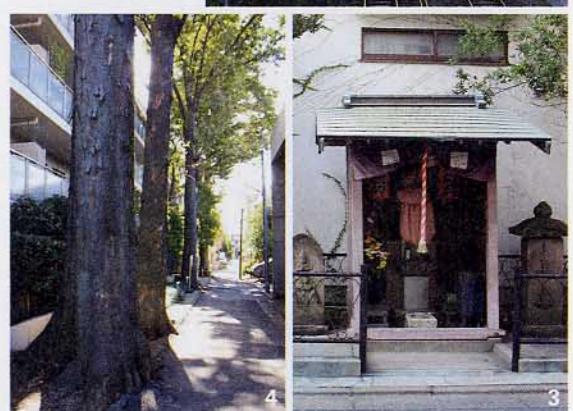
「その後、代田橋分譲地として売り出され、その宅地を購入したのが私の祖父、というわけです」

神津牧場から代田橋分譲地に至る歴史を在塚さんに伺っているうちに、谷の底から丘へ上り、地域共生のいえ在林館に到着。

地域の方々が気軽に立ち寄れるギヤラリーとして2012年10月に開館。訪れたこの日は「和田堀給水所と私」というタイトルで、これから行く和田堀給水所に関



1. ゆるやかな上り坂と下り坂が連続する住宅街。2. 井の頭線が崖の下を通って行く。3. 羽根木神社の参道入り口にある子育て地蔵。4. マンション前のケヤキ並木は参道の雰囲気を今も伝える。



引先である華族や皇族にミルクやバターを納めていた。「その後、代田橋分譲地として売り出され、その宅地を購入したのが私の祖父、というわけです」

神津牧場から代田橋分譲地に至る歴史を在塚さんに伺っているうちに、谷の底から丘へ上り、地域共生のいえ在林館に到着。

貴重だ。

する地元の方々の聞き書きや図面が展示されていて、ここが地域の貴重な場所であることを伝えている。もうひとつ絵地図は、大正時代の羽根木周辺の覚え書きであったと、まちを知る貴重な資料が展示されている。この地に住み始めて80年の時を経た在塚家には、思い出とともにたくさん資料が残されている。家を語り継ぎ、まちを語り継ぐ場としても在林館の存在は貴重だ。

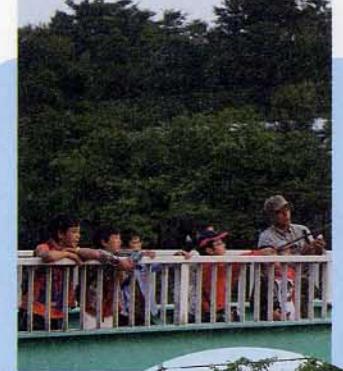
絵地図は、大正時代の羽根木周辺の覚え書きであったと、まちを知る貴重な資料が展示されている。この地に住み始めて80年の時を経た在塚家には、思い出とともにたくさん資料が残されている。家を語り継ぎ、まちを語り継ぐ場としても在林館の存在は貴重だ。

の部屋には、在塚さんが小学校2年生の時に描いた東松原商店街の地図があつたり、町の接骨院に飾つてあったという絵地図は、大正時代の羽根木周辺の覚え書きであったと、まちを知る貴重な資料が展示されている。この地に住み始めて80年の時を経た在塚家には、思い出とともにたくさん資料が残されている。家を語り継ぎ、まちを語り継ぐ場としても在林館の存在は貴重だ。

の部屋には、在塚さんが小学校2年生の時に描いた東松原商店街の地図があつたり、町の接骨院に飾つてあったとい



1. 在林館の前に立つ在塚さん。2. 在塚さんが幼少時遊んだ小川は小道に。3. 羽根木神社。秋祭りには女神輿も練り出す。4. 「帝都西郊の名物」といわれた円形劇場のような1号配水池。5. ゆづり橋と玉川上水。水道管が上を通る。



コウモリ観察

つりざおに小さな毛(疑似餌)をつるして振ると、飛び付こうとして近くまで飛んでくるよ。

日没の時間、川の近くに行ってみよう。

夕方明るいうちから、川の上を飛び始めるよ。

川から湧いてくる虫(力の仲間)を食べているんだ。



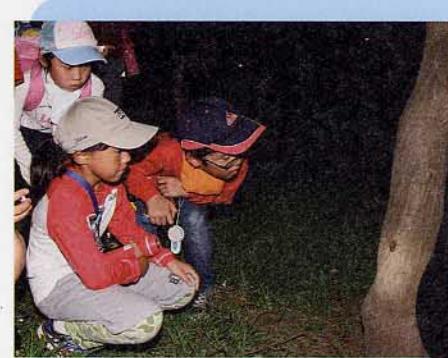
雨戸のすき間、橋の下、木の裂け目…とかだよ

夕方から日が暮れるまでの時間帯は、生きものの様子が変わっていく、とても面白い時間だよ。



わあ!
すばやい

コウモリの体重は、たったコイン2枚分くらい
(5~10グラム)
一晩で500匹、体重の半分くらいの重さの虫を食べるよ。
すごいね!



セミの羽化観察

昼間、ぬけがらが多かったところで、地面から出てきた幼虫が木を登っていくのを探そう。



羽化したの、初めて見た!

ガンバレ!



アブラゼミ・ミンミンゼミは7月上旬から8月上旬くらいまでが観察しやすいよ。

こんなところにもいた!

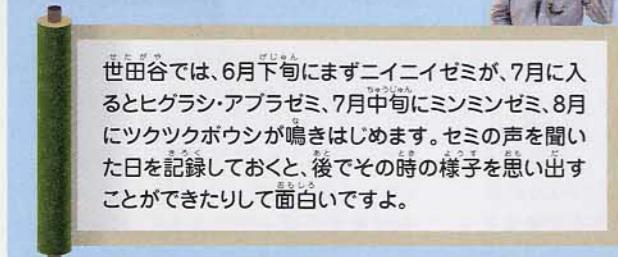


気に入った場所でじっとしたら、ゆっくりカラから出てくる(=羽化)
完全に出ると、姿勢を変えてぶらさがる。
羽が伸びるまでだいたい2時間くらい。

時間がかかるけどみんなもガンバって!



世田谷では、6月下旬にまずニイニイゼミが、7月に入るとヒグラシ・アブラゼミ、7月中旬にミンミンゼミ、8月にツクツクボウシが鳴きはじめます。セミの声を聞いた日を記録しておくと、後でその時の様子を思い出すことができたりして面白いですよ。



[注意]・必ず大人の人といっしょに行きましょう。・虫除け(虫を観察するので、電気式は避けましょう)、虫さされ用薬なども準備しておくと良いです。

準備 下見が大事!

・夜の観察には、昼間のうちに、場所を見つけておこう。

・日没時間(=太陽の沈む時間)を調べておこう!



セミの出てきた「穴」を見つける

大きな木のまわりの地面を探そう



木の枝、幹、くつついでいる

生きものハカセ 伊藤さんの七つ道具



両手は空けておきましょう。ものは手に持たないでかばんへ入れましょう。

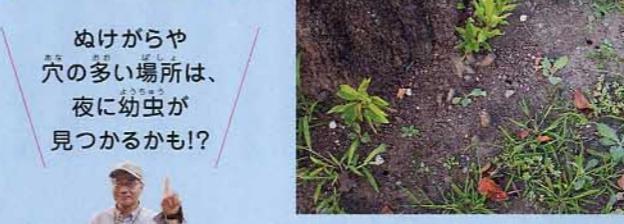
生きもの図鑑

むしめがね 捕虫網



みつけて記ろくするノートとペン

ケース 懐中電灯



ぬけがらや穴の多い場所は、夜に幼虫が見つかるかも!?



夜の生きもの
夏編

トラスト子ども会員のみんなと楽しもう!

子ども生きもの探検隊

生きものハカセ! 伊藤晴康さんと行くある日のビジターセンター周辺

夏の夜、セミの羽化とコウモリを観察しよう!

今回は、ビジターセンター近くの野川と野川緑地広場で観察したよ。

見つけ方が分かれれば、みんなの家のそばでも、見つけることができるよ!

夏になったら、みんなも家族や友達とさがしてみてね!

他課からのお知らせ

このコーナーでは、住まいづくり課と管理課の情報をお知らせしていきます。

あなたもぜひ、トラスト会員に!

世田谷のみどりや歴史を守り育て、次世代に引き継ぐ
「世田谷のトラスト運動」をささえるトラスト会員になりませんか。

会員種別と年会費

- 個人賛助会員:1年会員 1口1,000円 3年会員 1口3,000円
- 家族賛助会員:1年会員 1口2,000円 3年会員 1口6,000円
- 法人賛助会員:1年会員 1口10,000円 3年会員 1口30,000円
- 子ども会員:小学校在学期間1,000円
- 学校会員:無料 ※区内の小中学校が対象

会員特典

- 1 会員証発行 ※学校除く
- 2 情報誌「ひと・まち・自然」等の送付 ※希望者に送付します。情報誌等は財団HPからもダウンロードできます。
- 3 事業協力者からのサービス提供 ※詳しくは当財団までお問い合わせください。

提携美術館インフォメーション

トラスト会員の方は、優待制度をご利用いただけます。
提携美術館では、以下の展示が予定されています。

『桑原甲子雄の写真 トーキョースケッチ60年』
2014年4月19日(土)~6月8日(日)

世田谷美術館
☎03-3415-6011

『ボストン美術館 華麗なるジャポニズム展
印象派を魅了した日本の美』
2014年6月28日(土)~9月15日(月祝)

『松本壇樹コレクション ユートピアを求めて
ポスターに見るロシア・アヴァンギャルドとソヴィエト・モダニズム』
2014年9月30日(火)~11月24日(月祝)

世田谷文学館
☎03-5374-9111

『茨木のり子展』
2014年4月19日(土)~6月29日(日)
『日本SF展・SFの国』
2014年7月19日(土)~9月28日(日)

静嘉堂
文庫美術館
☎03-3700-0007

2014年3月17日(月)から約1年半、改修工事のため休館

※展示内容など、詳細につきましては直接各施設にお問い合わせください。

ご寄附のお礼

2013年9月1日~2月28日までに、会費と一般寄附で、総額3,234,663円のご寄附をいただきました。どうもありがとうございます。今後も引き続きご支援の程、よろしくお願ひいたします。

エコポイント環境寄附について

当財団は、国の「復興支援・住宅エコポイント事業」の環境寄附対象団体となり、エコポイントを利用した商品取得と同じ手続きで、ご寄附をいただくことができます。詳細については、当財団までお問い合わせくださいか、ホームページをご覧ください。

募集

せたがやの家(ファミリー型) 入居者募集中

世帯の所得に応じて家賃補助がある特定優良賃貸住宅「せたがやの家」では、随時、入居者を募集しています。礼金・手数料もかかりません。間取りは2LDK~3LDK。申込資格や物件詳細については、財団ホームページより、「せたがやの家先着順募集物件一覧」をご覧ください。



住まいづくり課せたがやの家担当

03-6407-3302

三軒茶屋キャロットタワー駐車場が リニューアルしました

財団が管理するキャロットパーク駐車場がリニューアルオープンしました。ナンバー自動読み取り式ゲートや空き区画の案内灯などを新たに設置し「利用しやすい駐車場」として、また場内照明のLED化やカーシェアリングなど、環境へ配慮したエコ設備を導入しております。ぜひ一度ご利用ください。



営業時間 7:00~23:00 年中無休

駐車料金 30分 / 300円

お問い合わせ キャロットパーク管理室
03-5486-2311

自動二輪車用月極駐車サービスも提供しております。

報告

区営住宅の 「地域コミュニティサポート」事業として 健康体操などを実施



住まいづくり課では、区営住宅の管理を行なっています。その一環として区営住宅自治会とまちづくりグループなどが連携し、居住者同士や地域住民とのコミュニティ促進を図るための「地域コミュニティサポート」を実施しています。毎年、区営住宅内集会室で、健康体操や紙芝居などを開催しています。また、居住者の防災力を高めるための防災サポートとして、消防訓練・防災教室も各住宅で実施しています。

募集

空き家等の地域貢献活用 モデル事業の採用団体決定

10月27日(日)に「世田谷らしい空き家等の地域貢献活用」の発掘を目的とするモデル事業の公開審査会を開催、「死別体験等で深い悲しみを抱く子ども達が集い遊べる場」「シェアキッチン／コワーキング／イベント開催のためのコモンスペース」、「デイサービス・認知症カフェを備えた地域多世代交流拠点」の3つの企画が採用決定。各団体は春の活動スタートを目指し整備中です。



トラマチ

topics

トラストまちづくり課の下半期(2013年9月から2014年2月まで)の活動トピックスをご紹介します。

市民緑地の果樹を活かした イベントを実施しました

暮らしに根付いた果樹が植えられているのが市民緑地の特徴です。今年は秋~冬に柿もぎ(谷戸の坂市民緑地・10月)、ユズの収穫(いらか道市民緑地・12月)を行い、参加者は昔ながらの「タッパ竿」などを使った収穫を楽しめました。今後も多くの区民の方々に市民緑地に触れて、楽しんでいただける機会を創出していくことを目指します。



世田谷トラストDAY ～ネットワークによる 環境保全について考えました

2月2日(日)環境保全や地域資源の活用を「ネットワーク」により進める活動について、2つの事例「①みんなでつくる里山公園～狭山丘陵の都立公園を事例に」を「NPO法人NPO birth」佐藤留美さんより、「②住民がまちの主役に～神楽坂のまちづくりの20年」を「NPO法人粹なまちづくり俱楽部」寺田弘さんより伺いました。また、世田谷のトラスト運動の活動報告を行いました。



十三夜を楽しもう! 瀬田四丁目広場の夕べ

旧暦の十三夜にあたる10月17日(木)、歴史的佇まいを季節感とともに楽しんでいただこうと、旧小坂家住宅を夜間特別開園し、お月見イベントを開催しました。当日は、十三夜のお供え物やススキ等を飾り付け、夕方からは富田広先生をお招きして「人々の暮らしとともにあった十三夜行事と植物の関わり」について特別講演を行っていただき、来園者とともにかつての暮らしに思いを馳せました。



世田谷総合高校(2年生)の 奉仕体験活動グループ学習受入

今年で2年目となる受入は、全6回[9月6日(金)・13日(金)、10月11日(金)・18日(金)、11月1日(金)・8日(金)]の工程。岡本緑地ボランティアと共に、岡本静嘉堂緑地バッタ広場にて、草刈りや樹木の移植など保全作業を体験してもらいました。なかでも、自分たちで竹を伐り出し、杭を打ち、ススキで屋根を葺いた「土場(資材置場)」の完成は、特に感慨深かったのではないかでしょうか。



学生インターンシップ プログラム2013 合同報告会を開催

6回目となる今年は12大学・専門学校から16名の学生が参加。10月17日(木)の報告会では、学生が自主企画した「商店街での“まちゼミ”」、「風鈴の絵付け」、「モールアート」ワークショップ、「手づくり紙芝居の上演」のほか、小学校のサマースクールの手伝い、剪定・草刈・斜面の笹刈・土留づくりなどみどりの保全活動への参加等、9団体のまちの現場での活動体験が報告されました。



「まち仕事をつくる 連続講座」 ～暮らすと働くをつなぐ一週間を開催

2月1日(土)~7日(金)の期間「働くと暮らすをつなぐ一週間」TW DW SETAGAYAを企業・NPO・財団が協働し、二子玉川のコワーキングスペース「カラリストBA」にて開催。当財団では、「地域課題解決等をボランタリーベースから事業化へ」をキーワードに「まち仕事」について考えるセッションを3日間開催。①韓国ソニミサンマウル②虎ノ門リトルトーキョー③社会起業家支援(NPO法人ETIC.)について学び、3日間で147名に来場いただきました。



環境にやさしい 街並み活動が進行中

今年度本格始動した3軒からはじまるガーデニング支援制度。現在5グループに、ガーデニングアドバイザーの派遣や緑化資材購入費の一部助成などの支援を行っています。グループのメンバーは、みんなで緑化プランを作成し、花壇やフェンス、玄関脇や駐車場などで、花とみどりあふれる美しい街並みに取り組んでいます。また、この活動をとおしたコミュニティの輪も広がり始めています。



せたがや の 宝物

アブラコウモリ

【ヒナコウモリ科】

人間とひとつ屋根の下 大家族で暮らす「幸福の象徴」

春先から秋口にかけ、ある意外

な哺乳類が、私たちの暮らしに身近な場所で活動しています。その

動物の名は、コウモリです。世田

谷で見られるのは、アブラコウモリで、イエコウモリという別名からわかるとおり、家屋の天井裏や瓦屋根の下、壁の隙間などを棲みかにし、集団を形成して

超音波を出し物体までの距離を測ることで、暗闇のなかでも自由自在に飛び回ることができます。

コウモリといえば、吸血鬼や墓の周りを飛ぶ暗く不吉なイメージをまっさきに抱く人も多いでしょう。しかし、中国などの東アジアでは幸福の象徴とされていますし、

ハエやカなどの羽虫を食べるため、益獣として人間に貢献する一面をもつてゐるのも事実です。めったに見ることができませんが、運がよければ、夏の早朝、軒下などでねぐらに帰る前にひと休みする姿を間近で観察することができます。その姿形をひと目見れば、きっと親しみが湧いてくるでしょう。

温暖化が進む現在、都市部でのアブラコウモリの数は増えつつあるようです。人間と小さな命、同じまちに住む生きものとして互いの住環境を尊重しつつ、共に暮らしていくなら素晴らしいですね。



上／近くで見たアブラコウモリの姿。意外にも愛らしい。下／活動場所となる夕刻の野川の風景。



ひと・まち・自然

トランセ PLESS Vol.12 2014年3月発行



発行／一般財団法人世田谷トラストまちづくり

編集／一般財団法人世田谷トラストまちづくり トランセ PLESS

〒155-0031 東京都世田谷区北沢2-8-18 北沢タウンホール7階 Tel.03-6407-3311, 3313 Fax.03-6407-3319

<http://www.setagayatm.or.jp/>

編集協力
松井編集室

取材・文
大木茉莉 (p2~7 / p20)
小池良実 (p10~15)

イラスト
来迎純子 (表紙 / p8~9 / p20)
南樹里 (p13)

デザイン
須崎み江

写真
佐藤隆俊 (p2~7)
松井晴子 (p2~5 / p12~13)

©一般財団法人世田谷トラストまちづくり
2014 Printed in Japan
本誌掲載の写真・記事等の無断転載および複写を禁じます。



世田谷区が進める「世田谷みどり33」に連携し、みどりの保全・創出に取り組んでいます。